

# 平和イメージにおける性差

松 尾 雅 嗣

広島大学平和科学研究センター

## SEX DIFFERENCES IN PEACE IMAGE

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

### SUMMARY

There have been several studies on children's image of peace. Though they have taken up sex as an independent variable, it has not been clear whether sex is a significant variable accounting for differences in children's image of peace

The present paper examines sex differences in university students' image of peace on the basis of an association test conducted in 1982. The result shows that

- i) male students' responses are more variegated than female students', and conversely, female students' responses are more stereotyped than male students',
- ii) there is no sex differences in the "meaningfulness" of the Japanese word "heiwa" which roughly corresponds to the English "peace",
- iii) there are many response words which show sex difference in the rate of response, and concerning these words, female responses are semantically characterized by the dominance of "positive peace" while male responses are characterized by that of "negative peace",

iv) there is no significant sex difference in the basic structure of peace image as a whole in that, both with males and with females, the peace image consists of two components, that is, "positive peace" and "negative peace".

## 目 次

はじめに

1. 従来の研究における平和イメージと性
2. 有意味度と多様性における性差
3. 個々の反応語からみた性差
4. 平和イメージの構造と性差

結 び

### はじめに

「平和とはどういうものであるかについて、人々が抱いているイメージ、観念」という意味での平和イメージないしは平和像の研究は、従来主として児童を対象に行われてきた。このような研究における関心事のひとつは、性、世帯の社会経済的な位置、文化、ないしは政治文化といった変数が、平和イメージにどのような影響を与えるか、平和イメージをどのように規定するかということであった。児童を対象とした研究が多いことから、児童の知的発達段階と平和イメージの関係が論じられることもしばしばであった。詳細は後述するが、従来の研究結果を敢えて一言にして言えば、上述の変数は平和イメージに影響する、即ち、性や政治文化が異なれば、人々の抱く平和イメージも異なるというものであった。<sup>1)</sup>

本稿は、このような変数のひとつとして性を取上げ、性の違いにより平和イメージがどのように異なるかを検討する。具体的には、まず従来の平和イメージ研究における性差の扱いを概観し、次いで、大学生約1,000名を対象とした自由連想調査結果にもとづいて性と平和イメージの関係を検討する。

#### 1. 従来の研究における平和イメージと性

平和イメージの研究は、Cooper(1965)をもって嚆矢すると言えよう。Cooper以前の研究については、Ålvik(1968)に簡単なレビューがある。<sup>2)</sup> Ålvikによれば、

従来児童の戦争と平和に関するイメージの研究は乏しく、しかも平和イメージに関する研究は更に少ないとされる。また、従来の研究に関しては、児童の性、年齢、知的発達段階、社会的経済的背景といった独立変数の重要性が指摘されていること、「平和」概念よりも「戦争」概念のほうが豊かであること、といった研究成果が挙げられている。

ここでは、Cooper以後の研究について、平和イメージと性の関連がどのように論じられているかを吟味しておく。但し、戦争、日本国憲法9条、核保有の可否、といった問題に対する意識、態度という意味での平和意識における性差についてはここでは取り上げない<sup>3)</sup>。Cooper以後の研究の一般的傾向について簡単に一言しておけば、児童を主たる対象とすること、「平和」を意味する言葉を刺激語とする連想調査法か、「平和とは何か」についての自由記述法という形で「平和」という言葉を手掛りとする、Piagetの児童の知的発達理論との関係づけて論じられていること、といった特徴をもつ。

Cooper(1965)は、この種の研究に先鞭をつけたものであるが、対象は、7～16歳のイギリス人児童231名(うち男93名、女138名)と、日本人児童113名(うち男71名、女42名)である<sup>4)</sup>。Cooperのひとつの功績は、“peace”に対する児童の反応を、「休止、静穏」(inactivity)、「争いのないこと」(respite)、「友好的活動」(sociable activity)、「講和、和平」(reconciliation)の4つのカテゴリーに分けたことであろう<sup>5)</sup>。分類それ自体の当否<sup>6)</sup>、あるいは英語圏以外の文化への適用の可否等の問題はあるが、これが以後の研究者によって踏襲されるモデルを提示した意味は大きい。性差に関して言えば、対象とした男女間で差があるのは、平和イメージではなくてむしろ戦争イメージないしは戦争観である。Cooperは結論として次の諸点を列挙している<sup>7)</sup>。

女子児童の場合、「戦争」に対する連想は、男子児童に比べより抽象的で具体性を欠く。

女子児童のほうが、一般的には、戦争否定の態度が強い。しかし、家族が危険にさらされるといった状況では、男子児童より戦争肯定の度合<sup>8)</sup>は強くなる。

女子児童の戦争イメージは、「通常戦争」に限定される傾向にある。

しかしながら、Cooperは、平和イメージにおける男女差については、特に論じていない。

Cooperの研究を受けて、Ålvik (1968), Rosell (1968), Haavelsrud (1970)が、それぞれ、ノルウェー、スウェーデン、西ドイツでの同様の方法による調査結果を報告している。三者とも、性を平和イメージに影響を与えうる変数と見做しているが、<sup>9)</sup> Ålvik, Rosellでは、平和イメージに関する性差の問題は論じられていない。これに対し、Haavelsrudでは、性差の問題がわずかではあるが論じられている。Haavelsrudは、まず、Nobleの有意味性 (meaningfulness) 指標と、<sup>10)</sup> 性という変数の間に相関があるというデータを挙げ、<sup>11)</sup> 男子児童の「戦争」と「平和」それぞれに対する反応語数は、女子児童のそれに比べて少ないこと、即ち「戦争」と「平和」は、男子児童より女子児童にとって相対的に有意味度が高いことを指摘している。<sup>12)</sup> Haavelsrudは、自由記述の解答から反応語を抽出して有意味度を算出しているが、有意味度の性差については、連想調査結果にもとづく本来の意味での有意味度を基に次節以下で検討する。

また、平和イメージそのものについては、女子児童のほうが、男子児童に比べ、より「積極的」なカテゴリー、即ち、「戦争の不在」以外の「共存」といったカテゴリーに言及する傾向があるほかは、性差はないとされている。<sup>13)</sup>

Cooper, Ålvik, Rosell, Haavelsrud はいずれも、平和イメージのみを対象としたものではないが、平和イメージに関しては性差はないとしている。この点に疑義を投げかけたのが、Ehly (1972)である。Ehlyは、CooperからHaavelsrudに至る研究で平和イメージにおける性差が看過されたのは、Cooperに始まる前述の分類<sup>14)</sup>に起因する可能性を示唆する。そして、その証拠として、自分のデータを使った4つのカテゴリーと性との $\chi^2$ 値を計算し、有意差がなかったという事実を挙げている。<sup>15)</sup>

Ehlyの調査は、英国のランカスター (189名、男99名、女90名)、カナダのエドモントン (191名、男95名、女96名)、米国のシカゴ (168名、男89名、女79名)の、3カ国3地点における児童をサンプルとするものである。<sup>16)</sup> Ehlyは、Cooperの平和イメージの四分類とは別に、「能動的」—「受動的」と、「関与的」—「非関与的」というふたつの分類規準を設定し、<sup>17)</sup> この規準による分類と、

年齢、知的発達段階、性、社会経済的狀態といった9変数との關係を検討している。<sup>18)</sup>ただ Ehly の場合、ふたつの従属変数のそれぞれと、9つの独立変数の關係の説明に、多変量解析法による結果だけを報告しているので、従属変数と個々の独立変数、例えば、性、との關係が必ずしも明らかでないという憾みが残る。それはともかくとして、「能動的」—「受動的」という軸で考えた場合、男子児童の平和イメージのほうが、一般的に、女子児童の平和イメージより、相対的に「能動的」である。ただ、この「能動的」—「受動的」という変数に関しては、地域、信仰心といった変数のほうが規定力が高い。<sup>19)</sup> Ehly は更に、児童に絵を描せ、それを同様の規準によって分類した結果を分析しているが、それによれば、性差は歴然としている。即ち、男子児童の絵のほうが、女子児童のそれより明らかに「能動的」である。<sup>20)</sup>

Ehly の導入した第二の規準である「関与的」—「非関与的」という規準は、児童の平和イメージに関し、それが児童に直接関わりのあるものか否を判断の規準とするものである。<sup>21)</sup>この変数と他の独立変数との關係の分析結果によれば、平和イメージにおける「関与性」に関しては、性差はほとんど認められないし、児童の描いた絵の分析においても同様である。<sup>22)</sup>

Ehly の研究は、平和イメージに関してはほとんど性差がないとした従来の研究に対し、平和イメージに関しても性差のあること、を示しえた、少なくとも性差の存在しうる可能性を示唆しえたものと解することができよう。勿論、自由記述に対する応答であれ、連想調査の反応であれ、それを「能動的」—「受動的」という規準によって分類するときの信頼性、ないしは安定性という問題は残る。どのような規準によって「能動性」、「受動性」を判断するかが明らかでないからである。

カナダのバンクーバー（392名、男女ともに196名）、インドのニューデリー（280名、男157名、女123名）の児童を対象として<sup>23)</sup>同様の分析を試みたのが、Hook（1979）である。Hookは、Cooperの分類に加えて、「消極的」—「積極的」と、「具体的」—「抽象的」というふたつの軸を設定し、これによる平和イメージの分析も試みている。Hookによれば、このふたつの規準の組合せによって、平和イメージは次の表1のように分類される。

表1 Hookによる平和イメージの分類

	消 極 的	積 極 的
具 体 的	武器 (mention of weapons)	牧歌的 (pastoral)
↑	人々の間に戦いのないこと (people not fighting)	人々の中の友好 (friendship between people)
↓	国と国の間に戦いのないこと (countries not fighting)	国と国の協力 (countries cooperating)
抽 象 的	苦しみのないこと (absence of suffering)	概念的, 理論的 (conceptual or theoretical)

出所: Hook (1979) p. 93

表1に示された8つのカテゴリーのうちには、カナダとインドともに、あるいはいずれか一方に関し、性差が認められるものは幾つかある。「武器」、「国と国の間に戦いのないこと」、「牧歌的」、「国と国の協力」などがそれである<sup>24)</sup>。ここで興味深いのは、「消極的」—「積極的」という二分法を用いた場合、「消極的」カテゴリー全体としては、男子児童の反応が多く、「積極的」カテゴリー全体としては、女子児童の反応のほうが多いという点である<sup>25)</sup>。

このように性差を認めうる点もあるが、Hook自身も述べているように<sup>26)</sup>、児童の平和イメージにおける明確な性差の存在を認めることは困難といえよう。

以上、児童を対象とした平和イメージ研究における性差の扱いを概観した。結論的に言えば、これまでの研究成果だけでは、児童の平和イメージにおける性差の有無は早急には判断できない。一般的に児童の政治意識や概念については、性差があるとの報告もあれば<sup>27)</sup>、逆に性差はないという報告もある<sup>28)</sup>。平和イメージという、ごく小さな部分に関しても、様々なデータによる比較検討が必要であろう。

しかしながら、更に重要な問題は、平和イメージ研究においては、本節で概観したように、成人についての研究が行われていないということである。石田(1968)、Galtung(1981)のような平和観の比較研究はあるが、成人の平和イメージそのものを対象とした研究は行われていないのが現状である<sup>29)</sup>。本稿では、以下、成人の平和イメージ研究のひとつの試みとして、大学生の平和イメージにおける性差の有無を検討する。

## 2. 有意味度と多様性における性差

本節以下では、大学生を対象とした連想調査結果にもとづいて、平和イメージにおける性差の有無を検討する。以下で用いるデータは、松尾(1983)で用いられたデータと同じである。調査の概要は次のとおりである。

調査時点 1982年9月, 10月(一部6月)  
調査地点 広島市, 山口市, 福岡市  
被験者 大学生(一部短大生)  
被験者数 962名

被験者の地域別, 性別内訳は表2に示すとおりである。<sup>30)</sup>

表2を瞥見した限りでは, 地域という変数と平和イメージの関係も, このデータにもとづいて分析できるかに見える。

しかし, 被験者は, 特定の地域の大学に所属する学生であり, 彼らと, 文化, 伝統, あるいは社会経済的レベルといった地域の特性との関連は必ずしも一義的

には定まらない。従って, ここで, このデータにもとづいて平和イメージの地域差の問題を論ずることは無理であり, ここでは地域の問題は論じないことにする。<sup>31)</sup>

以下, 上述の調査結果を使って, 平和イメージにおける性差の問題を考えることにするが, その際, 次のような手順に従う。まず, 形式的な側面からのアプローチとして, Haavelsrud(1970)の取り上げた有意味度における性差を検討する。これは, 平和イメージにおける多様性と斉一性, あるいは拡散度と疑集度の問題と言える。第二に, 「平和」という刺激語に対する反応語を個別的に検討し, どのような語彙に性差が認められるか, 認められないかを検討する。第三に, 反応語全体を対象として性差の有無を検討する。

一般に, 連想調査の反応については, 女性の反応のほうが, 画一的, 斉一的であるとされる。<sup>32)</sup> ここでは, まずふたつの指標を用いてこの点を検討してみる。

表2 被験者の地域別, 性別内訳

	男	女	計*
広島	310	65	380
山口	262	83	349
福岡	122	111	233
計	694	259	962

\* 性別不明(総計9名)を含む。



第一の指標はエントロピーであり、第二の指標は Haavelsrud (1970) にも用いられた有意味度の指標  $m$  である。エントロピーは、周知のように情報科学で情報量を定義するための量であるが、言語データに関しては、使用語彙のバラツキを示す指標としても用いられる。<sup>33)</sup> 連想調査において、刺激語に対する反応語  $i$  の出現比率を  $P_i$  とすれば、エントロピー  $H$  は次の式で与えられる。

$$H = - \sum_i^N P_i \log_2 P_i$$

但し、 $N$  は反応語の種類数 (タイプ数)

男女別にエントロピーを計算してみると結果は次のようになる。<sup>34)</sup>

$$\text{男 } H = 8.120$$

$$\text{女 } H = 7.117$$

この結果は、明らかに男女差のあることを示す。エントロピーの値からして、男子学生の反応のほうがバラツキが大きい。逆に言えば、女子学生の反応のほうが特定の単語に集中する傾向が強い。連想調査に対する反応について一般に言われるように、女性の反応のほうが、より画一であることがここでも実証される。

次に、有意味度の指標である Noble の  $m$  を使って、有意味度という観点から、男女の差を考えてみよう。Noble の  $m$  は次式で与えられる。

$$m = \text{反応語総数} / \text{被験者数}^{35)}$$

男女別に  $m$  の値を計算すると次のようになる。

$$\text{男 } m = 4416 / 694 = 6.363$$

$$\text{女 } m = 1736 / 259 = 6.702$$

$m$  は、反応語数の平均値でもあるが、有意水準 5% では、男女の  $m$  の値に有意差

はない。<sup>36)</sup> 前節で紹介したように、Haavelsrud (1970) では、有意味度に性差を認めているが、大学生の場合、有意味度に関し統計的に有意な性差は認められない。

### 3. 個々の反応語から見た性差

前節では、「平和」という刺激語に対する反応の量的側面における性差を検討したが、本節と次節では、反応の質的側面を検討する。本節ではまず、反応語のうち頻度の大きい語について個別的に検討を加える。

反応語のうち、男女合計した反応度数が17以上のもの52語と、その性別の反応度数を次の表3に示す。

表3 反応度数順リスト

	全 体	性 別**	
		男	女
戦 争	577 (59.9)	397 (57.2)	175 (67.5)
鳩	499 (51.8)	326 (46.9)	165 (63.7)
広 島	286 (29.7)	201 (28.9)	82 (31.6)
原 爆 <sup>(1)</sup>	191 (19.8)	112 (16.1)	76 (29.3)
長 崎	147 (15.2)	91 (13.1)	56 (21.6)
幸 福	133 (13.8)	82 (11.8)	51 (19.6)
日 本	107 (11.1)	92 (13.2)	15 (5.7)
自 由	100 (10.3)	69 (9.9)	31 (11.9)
愛	99 (10.2)	65 (9.3)	34 (13.1)
憲 法 <sup>(2)</sup>	69 (7.1)	52 (7.4)	17 (6.5)
平 和 公 園 <sup>(3)</sup>	66 (6.8)	48 (6.9)	18 (6.9)
国 連	61 (6.3)	50 (7.2)	10 (3.8)
核	55 (5.7)	43 (6.1)	12 (4.6)
世 界	49 (5.0)	27 (3.8)	22 (8.4)
自 衛 隊	48 (4.9)	39 (5.6)	9 (3.4)
核 兵 器	47 (4.8)	31 (4.4)	16 (6.1)
麻 雀 園	42 (4.3)	41 (5.9)	1 (0.3)
公 園 <sup>(4)</sup>	41 (4.2)	35 (5.0)	6 (2.3)
憲 法 9 条 <sup>(4)</sup>	39 (4.0)	32 (4.6)	7 (2.7)
希 望	38 (3.9)	25 (3.6)	12 (4.6)
安 ら ぎ	37 (3.8)	22 (3.1)	15 (5.7)
自 然	34 (3.5)	19 (2.7)	15 (5.7)
家 庭	33 (3.4)	17 (2.4)	16 (6.1)

	全 体	性 別	
		男	女
日 米 安 保 <sup>(5)</sup>	33 ( 3.4)	29 ( 4.1)	4 ( 1.5)
核 廃 絶 <sup>(6)</sup>	31 ( 3.2)	21 ( 3.0)	9 ( 3.4)
軍 縮 <sup>(7)</sup>	29 ( 3.0)	21 ( 3.0)	7 ( 2.7)
青 空	28 ( 2.9)	14 ( 2.0)	14 ( 5.4)
安 心	28 ( 2.9)	20 ( 2.8)	8 ( 3.0)
鐘 白 <sup>(8)</sup>	27 ( 2.8)	14 ( 2.0)	13 ( 5.0)
子 人 供 類	26 ( 2.7)	18 ( 2.5)	8 ( 3.0)
ア メ リ カ <sup>(9)</sup>	26 ( 2.7)	14 ( 2.0)	12 ( 4.6)
平 等	25 ( 2.5)	21 ( 3.0)	3 ( 1.1)
家 族	23 ( 2.3)	15 ( 2.1)	8 ( 3.0)
理 想	22 ( 2.2)	13 ( 1.8)	9 ( 3.4)
永 遠	22 ( 2.2)	15 ( 2.1)	7 ( 2.7)
地 球	21 ( 2.1)	11 ( 1.5)	10 ( 3.8)
平 穩	21 ( 2.1)	14 ( 2.0)	7 ( 2.7)
ソ 連	21 ( 2.1)	13 ( 1.8)	8 ( 3.0)
緑	20 ( 2.0)	19 ( 2.7)	1 ( 0.3)
民 主 主 義	20 ( 2.0)	11 ( 1.5)	9 ( 3.4)
田 舎 来	20 ( 2.0)	14 ( 2.0)	6 ( 2.3)
未 来	19 ( 1.9)	17 ( 2.4)	2 ( 0.7)
夢	19 ( 1.9)	9 ( 1.2)	7 ( 3.8)
安 全 類	19 ( 1.9)	12 ( 1.7)	7 ( 2.7)
人 類	18 ( 1.8)	11 ( 1.5)	7 ( 2.7)
反 核	18 ( 1.8)	16 ( 2.3)	2 ( 0.7)
笑 顔	18 ( 1.8)	16 ( 2.3)	2 ( 0.7)
穩 約	17 ( 1.7)	13 ( 1.8)	4 ( 1.5)
条 約	17 ( 1.7)	10 ( 1.4)	7 ( 2.7)
戦 争 放 棄	17 ( 1.7)	14 ( 2.0)	3 ( 1.1)
		12 ( 1.7)	5 ( 1.9)

\* 数値は反応度数，( )内には，反応率（反応率＝反応度数／当該の被験者総数）を百分比で示す。小数第2位切捨。

\*\* 性別不明分があるので，男女合計は必ずしも全体と等しくならない。

(1) 「原子爆弾」を含む。 (2) 「日本国憲法」，「新憲法」を含む。 (3) 「記念公園」，「原爆記念公園」，「平和記念公園」，「広島平和公園」を含む。 (4) 「9条」，「第9条」を含む。 (5) 「安保」，「安保条約」を含む。 (6) 「核兵器廃絶」を含む。 (7) 「軍備縮小」を含む。 (8) 「白色」を含む。 (9) 「アメリカ」を含む。

この52語のうち、5%水準で反応率に統計的有意差のある語は、約半数の23語である。このうちでは、女性の反応率の高いものが16語とはるかに多い。具体的には、次の16語である。

戦争, 鳩, 原爆, 長崎, 幸福, 愛, 世界, 安らぎ, 自然, 家庭,  
青空, 鐘, 人類, 永遠, 緑, 未来

これに対し、男性の反応率の高い語は、次の7語である。

日本, 国連, 麻雀, 公園, 日米安保, ソ連, 田舎

こんな結果から、次のように言うことができよう。まず第一に、反応度数上位約50語の半数近くに統計的有意差が認められることからして、男女の反応には性差があると言うことができよう。しかし、何度か紹介したようにこの種の調査では、女性の反応は、特定の反応度数の大きい語に集中する傾向があり、上記の結果も、平和イメージの質の違いというよりも、むしろこのような一般的傾向のひとつの現われと見なすべきであるかもしれない。有意差のある語についてみれば、女子学生の反応が大きい語のほうがはるかに多いという結果もこの解釈を裏付けるものである。しかしながら、性差のある反応語を仔細に吟味するならば、単にこのような量的特性に関する一般的傾向のみによっては説明しえない、質的な差異の存在も認めることができる。

松尾(1983)は、表3に掲げた語のうち「麻雀」を除く51語を13のグループに分け、各グループの共出現関係を相関指標とする因子分析を行い、13グループの相互の布置が図1のようになることを明らかにしている。<sup>37)</sup>

性差の認められる次掲23語についてみると、男性の反応が大きい語は、図の左側、即ち第1因子の値が負となる側に、女性の反応が大きい語は、図の右側、即ち第1因子の値が正となる側に、偏る傾向が明らかに認められる。<sup>38)</sup> この対比は、意味内容に関して言えば、男子学生の反応はより公的政治的であり、女子学生の反応はより私的非政治的心情的であるという対比と解釈しうるであろう。また、

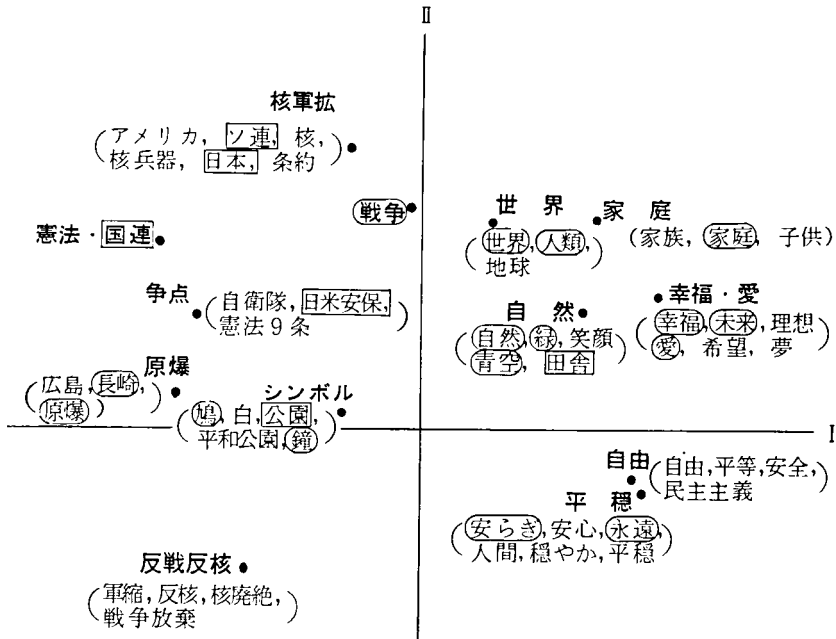


図1 13グループの相互的位置

( )内は各グループに属する単語を示す。

□ は男性の反応が多い単語を、○ は女性の反応が多い単語を示す。松尾(1983) p.22より作成。

松尾(1983)で行われたように、図の左側を「消極的」平和イメージ、右側を「積極的」平和イメージとする枠組で考えるならば、<sup>39)</sup> 男子学生の反応のほうがより「消極的」であり、女子学生の反応のほうがより「積極的」であると言える。これは、第1節で紹介した、Haavelsrud(1970)、Hook(1979)の調査結果とも一致するものである。<sup>40)</sup> この点を更に検討するために、上記51語を、松尾(1983)に従って13のグループに分類し、<sup>41)</sup> この反応率に差があるかどうかを考えてみよう。松尾による分類は次のとおりである。<sup>42)</sup>

“ 戦 争 ” ……「戦争」

“ (平和)シンボル ” ……「鳩」, 「白」, 「公園」, 「平和公園」, 「鐘」

“ 原 爆 ” ……「広島」, 「長崎」, 「原爆」

- “幸福・愛”……「幸福」, 「未来」, 「理想」, 「愛」, 「希望」, 「夢」
- “核軍拡”……「アメリカ」, 「ソ連」, 「核」, 「核兵器」, 「日本」,  
「条約」
- “自由”……「自由」, 「平等」, 「安全」, 「民主主義」
- “平穩”……「安らぎ」, 「安心」, 「永遠」, 「人間」, 「穏やか」,  
「平穩」
- “憲法・国連”……「憲法」, 「国連」
- “争点”……「自衛隊」, 「日米安保」, 「憲法9条」
- “自然”……「自然」, 「緑」, 「笑顔」, 「青空」, 「田舎」
- “反戦反核”……「軍縮」, 「反核」, 「核廃絶」, 「戦争放棄」
- “世界”……「世界」, 「人類」, 「地球」
- “家庭”……「家族」, 「家庭」, 「子供」

この13のグループの男女別の反応度数を表4に示す。なお、13グループに属する51語のいずれをも回答しなかった学生は、男子学生41名(5.9%), 女子学生5名(1.9%)である。

表4 13グループの男女別反応度数

	男	女
戦争	396 (57.0)	174 (67.1)
シボル	363 (52.3)	167 (64.4)
原爆	249 (35.8)	114 (44.0)
幸福・愛	168 (24.2)	88 (33.9)
核軍拡	169 (24.3)	45 (17.3)
自由	97 (13.9)	40 (15.4)
平穩	84 (12.1)	40 (15.4)
憲法・国連	91 (13.1)	25 (9.6)
争点	83 (11.9)	13 (5.0)
自然	64 (9.2)	30 (11.5)
反戦反核	64 (9.2)	21 (8.1)
世界	47 (6.7)	31 (11.9)
家庭	46 (6.6)	30 (11.5)

数値は、各グループに属する単語のうち少なくともひとつを答えた学生数を示す。  
( )内は、男女学生それぞれの総数694名、259名に対する百分比を示す。

表4のデータにもとづいて比率の検定を行うと、5%水準で次のグループに有意差が認められる。<sup>43)</sup> まず、男子学生の反応が多いのは、

“核軍拡”，“争点”

であり、女子学生の反応が多いのは、

“戦争”，“シンボル”，“原爆”，“幸福・愛”，“世界”，“家庭”

である。また、差が認められないのは，“自由”，“平穏”，“憲法・国連”，“自然”，“反戦反核”の5グループである。

ここでも、反応語を個々に検討した結論がほぼ妥当する。更に言えば、男子学生の反応が、現実の政治、軍事状況への関心を特徴とするのに対し、女子学生の反応は、より私的な、家庭というマイクロコスモスにおける幸福と、それを破壊するものとしての戦争被害を特徴とすると言えよう。

このような個々の反応語と反応語のグループにおける性差は、平和イメージ全体における性差を予測させるものである。次節では、この問題を検討する。

#### 4. 平和イメージの構造と性差

平和イメージ全体と言っても、これを具体的に表現することは困難である。ここでは、前節の13のグループについてその相互的關係ないしは相互の布置を考え、その男女差を検討する。このため、男女それぞれについて、まず13のグループ相互について、共出現関係にもとづくユールのQを算出した。<sup>44)</sup> 次に、方法としては乱暴であるが、このようにして得られた13×13のQ行列をそれぞれ因子分析した。<sup>45)</sup> このようにして得られた因子負荷行列を第Ⅰ因子、第Ⅱ因子について、男女別にそれぞれ表5、表6に示す。<sup>46)</sup> 表5、表6に与えられた因子負荷量をプロットして、13グループの相互的位置を視覚的に明らかにしたのが、図2と図3である。

図2、図3にそれぞれ点線で示したように、13のグループは、男女ともにふたつの大きな群に分かたれる。図から明らかなように、“世界”というグループを

除けば、ふたつの群は男女において完全に一致する。このふたつの群は、前節でも述べたように、松尾（1983）において、“消極的平和グループ”、“積極的平和グループ”と名付けられたものにはかならない。男子学生の場合、軸を回転し

表 5 13グループの因子負荷量(男)

	第 I 因子	第 II 因子
戦 争	0.372	0.446
シ ン ボ ル	-0.028	0.340
原 爆	-0.372	0.550
幸 福 ・ 愛	0.721	-0.079
核 軍 核	0.344	0.605
自 由	0.398	-0.431
平 穩	0.485	-0.162
憲 法 ・ 国 連	0.020	0.787
争 点	-0.052	0.653
自 然	0.531	0.052
反 戦 反 核	-0.370	0.166
世 界	0.395	0.316
家 庭	0.860	0.086

表 6 13グループの因子負荷量(女)

	第 I 因子	第 II 因子
戦 争	0.244	0.440
シ ン ボ ル	0.245	-0.043
原 爆	0.646	0.018
幸 福 ・ 愛	-0.640	0.539
核 軍 核	0.365	0.624
自 由	-0.408	0.446
平 穩	-0.849	-0.340
憲 法 ・ 国 連	0.995	0.200
争 点	0.938	0.096
自 然	-0.680	0.184
反 戦 反 核	0.368	-0.597
世 界	-0.040	0.848
家 庭	-0.032	0.185



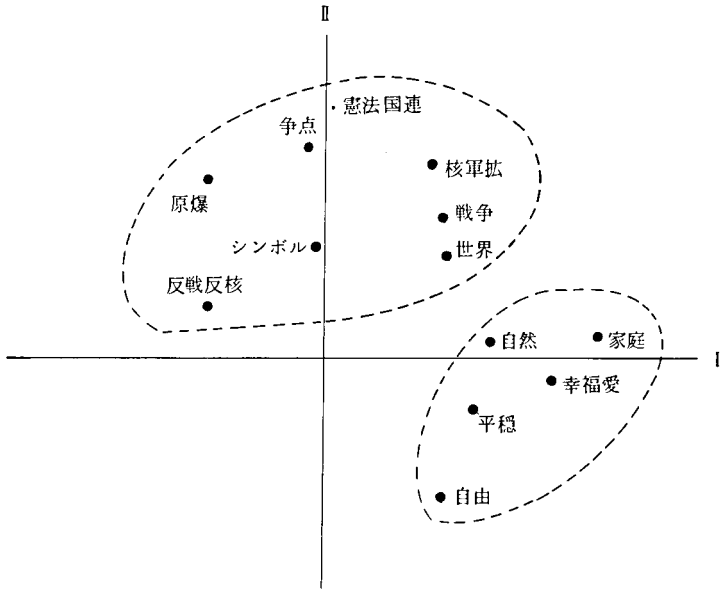


図2 13グループの相互的位置(男)

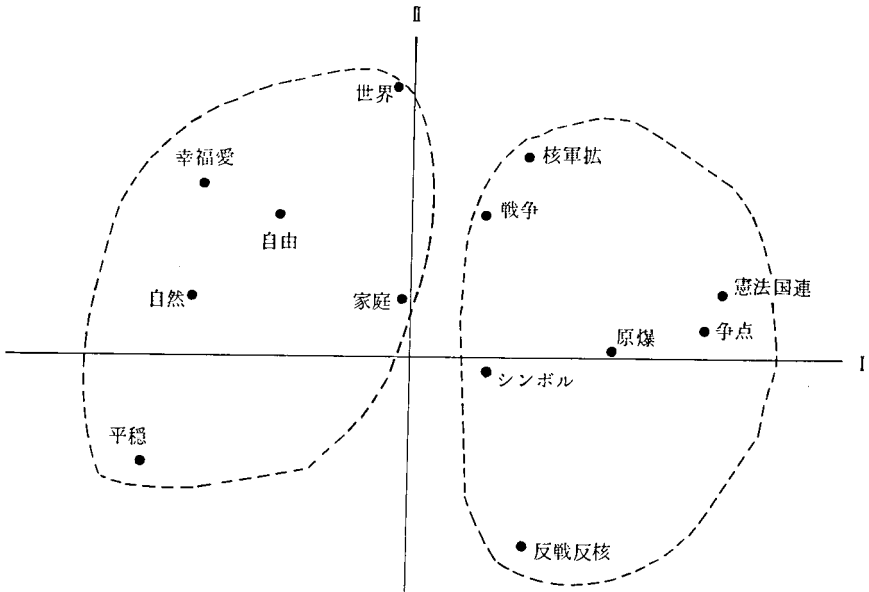


図3 13グループの相互的位置(女)

なければ、女子学生の場合のように、軸の値だけではふたつの群に分けられないという問題はあるが、男女ともに、“消極的平和”と“積極的平和”というふたつの群から成ることは明らかである。前節における13グループへの分類が妥当であることと、図2、図3が、男女それぞれの平和イメージの相当部分を反映していることを前提としなければならないが、この結果から見る限り、平和イメージが“消極的平和”と“積極的平和”というふたつの部分から成るという平和イメージの構造に関しては、男女の差はないと言える。

## 結 び

本稿では、「平和」を刺激語とし、学生約1,000人を被験者とした連想調査データにもとづいて、平和イメージにおける性差の有無を検討した。本稿で明らかにしたのは次の点である。

第一に、エントロピーを指標として、反応のバラツキを比較すれば、女子学生のほうが特定の反応に集中する傾向が大きい。このことは、反応度数上位の反応語では、女子学生の反応比率のほうが大きい語がはるかに多いことによっても確かめられる。第二に、「平和」の有意味度に関しては、性差は認められない。第三に、個々の反応語について言えば、反応率に性差のある語が相当数存在する。反応度数上位の語をグルーピングして反応率を比較しても同様である。しかも、このような性差が認められるとき、男子学生の反応は、“消極的平和”に傾き、女子学生の反応は、“積極的平和”に傾くという傾向が明らかに認められる。第四に、このような個別的反応、あるいは反応グループにおける量的質的性差にもかかわらず、“消極的平和”と“積極的平和”というふたつの部分から成るという構造、パターンに着目する限り、平和イメージに性差は認められない。この点に関しては、性差を云々するより、むしろ男女における一致度の高さに着目すべきであるかもしれない。

上述の結果は、本稿の行文から明らかなようにごく限られたデータと分析法によって導かれたものであり、この結果が直ちに一般的妥当性をもつものではないことは言を俟たない。多様なデータと多様な方法による今後の研究が望まれる。

## 註

- 1) 平和イメージそのものの分析ではないが、この点で着目すべきは、石田雄による「平和」を意味する語の異文化比較であろう。石田は、古代ユダヤ教の「シャーローム」(shālôm)」、ギリシャの「エイレーネ (eirene)」、ローマのパックス「(pax)」、古代インドのシャーンティ (sānti)」、中国、日本の「平和、和平」の比較分析を行い、各文化における正義、秩序、心の平安といった「平和」の意味特性を鮮やかに剔抉している。石田(1968) p p.18-37。  
また、石田の接近法と分析を踏まえて、世界観という観点から平和概念の異文化間比較を試みたのが Galtung (1981) である。
- 2) Ålvik (1968) p.171, p.177。
- 3) この点についての簡潔な概観と独自のデータによる平和意識の性差の分析については、小寺(1981)参照。従来の世論調査結果に関して言えば、一般に女性のほうが「平和的」であるとされるが、日本人を対象とした調査でも、必ずしも性差はない、という結果も報告されている。例えば、Kuroda (1966) p.386 (注3) 参照。
- 4) Cooper (1965) p p.2-3。
- 5) 同上 p.4。
- 6) Cooper 自身も分類の難しさは認めている。Cooper (1965) p.15 (注8)。また Ehly (1972) p p.42-43 参照。
- 7) Cooper (1965) p.8。
- 8) Cooper は 'provocability' という用語を用いている。Cooper (1965) p.6, p.8。
- 9) 三者ともサンプルにおける男子児童と女子児童の数をほぼ同数にしていることから明らかである。Ålvik (1968) p.175, Rosell (1968) p.269, Haavelsrud (1970) p.100。
- 10) Haavelsrud 前掲論文 p p.104-105 で使われている指標は、明示されていないが、明らかに Noble の  $m$  である。語の有意味度の指標  $m$  については、Noble (1963) p.84 参照。
- 11) Haavelsrud 前掲論文 p.105, 表7。使用された相関指標は明示されていないが、恐らくピアソンの連関係数 (コンティンジェンシイ係数) であろう。
- 12) Haavelsrud 前掲論文 p.106。
- 13) 同上 p.110。
- 14) Rosell, Haavelsrud は、Cooper とは多少異なった分類を用いている。Rosell 前掲論文 p.272, Haavelsrud 前掲論文 p.109。
- 15) Ehly 前掲論文 p.47
- 16) 同上 p.17。
- 17) 同上 p p.42-43。

- 18) 同上 p.45。
- 19) 同上 p.46, 図4, 3。
- 20) 同上 p p.51-52。
- 21) 同上 p.56。なお原文は, “personal”と“impersonal”。
- 22) 同上 p p.57-59。
- 23) Hook (1979) p p.86-87。
- 24) 同上 p p.96-98。
- 25) 同上 p p.97-98の表5~8にもとづく反応の延べ数の比較による。実際には, 多重分類による各カテゴリーの男女別, 国別百分比しか与えられていないので, 「消極的」—「積極的」という大きな枠でまとめたときの男女別の人数の比率は明らかでない。
- 26) Hook 前掲論文 p.98。
- 27) 例えば, Greenstein (1961) p.360。
- 28) 例えば, Durkin (1960) p.366。
- 29) 平和研究者を対象とした平和像に関するアンケート調査はないわけではない。例えば, Parker (1978) p p.9-10 参照。
- 30) 調査法, サンプリングの問題については, 松尾(1983) p p.7-8参照。
- 31) 地域差に関しては, 松尾前掲論文 p.8 も参照。
- 32) Cramer (1968) p.157。具体例については, 例えば, Palermo and Jenkins (1965) p p.79-80, 梅本(1969) p p.16-18 など参照。
- 33) 具体例については, 細井(1977) p.43参照。
- 34) 計算は, LEXのENTROPY命令によった。ENTROPY命令については, 松尾(1982) p p.91-93参照。
- 35) Nobleの定義式とは異なるが, 意味はまったく同じである。Noble(1963) p.84。
- 36) 標本平均は, 男6.363, 女6.702, 標本分散は, 男21.11, 女21.45, 標本数は男694, 女259である。検定法は, 西平(1957) p.151に従った。
- 37) 松尾(1983) p p.14-20。
- 38) 男性における「田舎」, 女性における「戦争」, 「鳩」, 「原爆」, 「長崎」, 「鐘」は例外である。女性における例外は, 上述の一般的傾向の現われとして説明しうるかもしれない。また「長崎」については, 前掲表2に示すように, 福岡の女子学生の比率が高いこともひとつの要因と考えて差支えないであろう。
- 39) 松尾(1983) p p.29-30, p.39。
- 40) 本稿 p.119, p.121参照。
- 41) 松尾前掲論文 p p.14-17。
- 42) 同上 p p.16-17。
- 43) 実際には, “原爆”と“核軍拡”を除いて, 1%水準で有意差がある。

- 44) 共出現関係とユールのQについては、松尾(1981) p p.103-112 参照。同様の適用例については、松尾(1983) p.14, p p.18-19 参照。なお、ユールのQの算出にあたっては、各グループに所属する単語のうち、少なくともひとつを答えていれば1, ひとつも答えていなければ0とし、LEXのCOMATRIX命令を用いた。後者については、松尾(1982) p p.142-145 参照。
- 45) 方法としては、所謂主成分分析法を用いた。計算には、広島大学総合情報処理センターのSPSSを用いた。
- 46) 回転前の初期因子負荷量である。

## 引用文献

- Ålvik, Trond (1968) 'The Development of Views on Conflict, War, and Peace among School Children : A Norwegian Case Study' *Journal of Peace Research* Vol. 5, No. 2, pp. 171-195
- Cooper, Peter (1965) 'The Development of the Concept of War' *Journal of Peace Research* Vol. 2, No. 1, pp. 1-17
- Cramer, Phebe (1968) *Word Association* Academic Press
- Durkin, Dolores (1960) 'Sex Differences in Children's Concept of Justice' *Child Development* Vol. 31, pp. 361-368
- Ehly, J.A.E.A. (1972) *Images of War and Peace : A Cross-national Study of Children's Orientations to Conflict and Cooperation in the Global System* Ph. D dissertation Northwestern University
- Galtung, Johan (1981) 'Social Cosmology and the Concept of Peace' *Journal of Peace Research* Vol. 18, No. 2, pp. 183-199
- Greenstein, Fred I. (1961) 'Sex-related Political Differences in Childhood' *Journal of Politics* Vol. 23, No. 2, pp. 353-371
- Haavelsrud, Magnus (1970) 'Views on War and Peace among Students in West Berlin Public Schools' *Journal of Peace Research* Vol. 7, No. 2, pp. 99-120
- Hook, Glenn D. (1979) 'Orientation to Peace among Canadian and Indian Children' *Peace Research in Japan 1978-79*, pp. 85-102
- 細井勉(1977) 「中学英語教科書の語彙」 数理科学 1977, 6月号, p p.38-43。
- 石田雄(1968) 『平和の政治学』 岩波書店。
- 小寺初世子(1978) 「性別による意識差」 庄野直美他編 『核と平和』(法律文化社) p p.115-131。
- Kuroda, Yasumasa (1966) 'Peace-War Orientation in a Japanese Community' *Journal of Peace Research* Vol. 3, No. 4, pp. 380-388
- 松尾雅嗣(1981) 「言語要素間の共出現の指標について — 自然言語データ分析の一手法

- として」 広島平和科学 No.4, pp.101-143。
- \_\_\_\_\_ (1982) 「テキスト語彙処理プログラム LEX」 広島大学平和科学研究中心  
報告シリーズ No.6。
- \_\_\_\_\_ (1983) 「連想調査による「平和」の意味分析」 広島大学平和科学研究中心  
研究報告シリーズ No.8。
- 西平重喜 (1957) 『統計調査法』 培風館。
- Noble, Clyde E. (1963) 'Meaningfulness and Familiarity', Cofer, C.N. and Musgrave,  
B.S. (eds.) *Verbal Behavior and Learning* (McGraw-Hill) pp. 76-155
- Palermo, David. S. and Jenkins, James J. (1965) 'Sex Differences in Word Associations'  
*Journal of General Psychology* Vol. 72, pp. 77-84
- Parker, Richard J. (1978) *Peace Research : A Questionnaire-based Assessment* The  
Peace Research Lab Monograph Series No. 1
- Rosell, Leif (1968) 'Children's Views of War and Peace' *Journal of Peace Research*  
Vol. 5, No. 3, pp. 269-276.
- 梅本堯夫 (1969) 『連想基準表』 東京大学出版会。